SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

翻訳における愛：イスラーム＝スペインが生んだアラビア語の恋愛論『鳩の首飾り』の現代スペイン語訳

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会 公開日: 2018-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: チェッリ, アンドレア, 山内, 功一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024902

翻訳における愛
――イスラーム＝スペインが生んだアラビア語の恋愛論『鳩の首飾り』の現代スペイン語訳[1]

アンドレア・チェッリ
山内功一郎（訳）

「翻訳」というテーマをめぐる一連の講演を行うためのトピックを示すように求められとき、私はとまどいを覚えました。というのも、自分は翻訳研究の専門家ではないからです。ちなみに、私の研究を特定のアカデミックな分野に限定しようとすると、しっくりしないことも申し上げておかねばなりません。自分の主要な研究領域は、「ヨーロッパ、とりわけイタリア、スペインおよびフランスが、中世後期から現代にかけて行ったイスラーム文化との交流」です。このトピックを、これまで私はさまざまなアカデミズムの範疇へと縮小しなければなりませんでした。たとえば、「批評史」、「思想史」、「異文化交流研究」など。私を採用した大学の学部によっては、呼び名は「イタリア研究」から「比較文化」のあいだでうつり変わりました。一番の大風呂敷は、私がここ数年教えている授業名でしょう。それは、「批評の解釈学と歴史」というのです。

ごく最近、私は「地中海研究」という概念に避難場所を見つけました。この分野は、国家や宗教の境界を越えた（文学を含む）文化現象の分析を目的としています。古代から現代にかけて、スペインからトルコにかけて、そしてイタリアやフランスからアラブ世界にかけて、地中海という領域は研究者に対してはとても寛大な領域ですし、旅行者に対してもおおむねそうです（移民に対してはそうではありませんが）。国家の同一性によって釘付けにされてしまうかわりに、この領域は基本的に国やアカデミズムの区分にとらわれない特徴をもつテーマへとひらかれています。地中海研究は、ある程度はフェルナン・ブロー

[1] 2017年前期に私を受け入れてくれた静岡大学人文社会科学部の教員の方々、とりわけ南富鎭先生に謝意を表したい。今回の滞在は極めて実り多い経験となった。そして私が最初に連絡をとって以来、滞在中もすすんで援助してくれた大原志麻先生にも感謝する。また深い友情を示してくれた花方寿行先生とスティーヴ・レッドフォード先生にも謝意を表したい。最後に、短いやりとりのあいだに翻訳に取り組んでくれた山内功一郎先生に感謝する。

デル、S・D・ゴイティン、デイヴィッド・アブラフィアといった歴史学者たちや、ペレグリン・ホーデンのような地理学者の業績から生じています。それは空白地帯に目を向け、ヨーロッパおよび地中海社会とその文化研究への伝統的なアプローチに、豊かな特色を与えることになりました。

間違いなく翻訳は、複数の中心をもち、場合によっては競合的でもある地中海の主要トピックのひとつです。それどころか、地中海とは、言語から言語への翻訳、文明から文明への翻訳のたゆまぬ努力そのものだとさえ言えるかもしれません。紛争や戦争も、このような翻訳のプロセスをさえぎることはありません。むしろそれらは、同じ力学の一部なのです。地中海は、語源的に「大地のさなかの海」、つまり土地に囲まれた海を意味することからも察せられるように、分離よりも「接続」を行う媒体です。この領域ならではの例としては、アッバース朝の初期イスラーム世界におけるギリシャ科学やインド哲学の膨大な翻訳があります。あるいは、「シンドバッドの冒険」や「パンチャタントラ」などといったインド説話の西ヨーロッパにおける流通がありますし、中世スペインにおけるアラブの科学書の体系的なラテン語訳も挙げることができます。あるいはまた、手法的に高度化した「ヴォルガリッザメント」の過程もその一例です。これはラテン語、ギリシャ語、古フランス語の原典をイタリア語の口語に訳すことであり、中世後期やルネッサンス期に行われました。地中海におけるキリスト教やイスラーム教の圏域においては、古代や外国の文書の翻訳は、芸術を支援すると同時に、王権の象徴にもなりました。

私の学術的貢献は、翻訳研究と隣接的な関連性ならもっています。そこで私は、アラビア語作品『鳩の首飾り』の現代スペイン語訳について簡潔に論じたうえで、特定の翻訳を生み出した歴史状況をめぐる考察を示したいと思います。この中世アラビアの恋愛論は魅力的な書簡体の論考であり、恋愛や恋人をめぐる随想（アラブ語で言えばリサーラー）です。それは世俗の愛をめぐるエレガントな散文の論述であり、その中に詩文がちりばめられています。著者はコルドバのイヴン・ハズムという名のアンダルシア人であり、西暦994年に生まれ1064年に没しました。イヴン・ハズムは宮廷の知識人であり、アンダルシアにあったウマイヤ朝の洗練された宮廷で育ちました。彼の著作の大半は神学や法律関係のものであり、それらはウマイヤ朝が崩壊したために流浪の身となった時代に執筆されました。そして20世紀初頭に、ミゲル・アシン・パラシオスをはじめとするスペイン人の学者が再発見したのです。しかし一般にハズムが認知されるようになったのは、間違いなく恋愛を論じた彼の書簡のおかげです。

散文と詩を織り交ぜたこの作品は、自伝的な思い出やユーモラスな逸話も駆使することにより、愛の特徴をひときわ鮮やかに定義しています。その論考のページからあらわれるのは、イスラーム＝スペインの活き活きとしたイメージであり、それはアンダルシアの貴族階級ならではの特権的な観点から綴られているのです。

もし私が抽象的な思弁を控え、かわりに30章からなる『鳩の首飾り』の数節を抜粋してひたすらそれを味わうことに徹すれば、きっと魅力的なことでしょう。これほど現代読者の琴線に触れる近代以前の作品は、多くはありません。もう一つ挙げるとすれば、おそらくそれは紫式部の『源氏物語』でしょう。この作品も洗練された宮廷の環境を示していますし、作者の紫式部はイヴン・ハズムと同時代の人物ですが、こういった点は偶然ではありません。しかし私はそのような問題に取り組むかわりに、『鳩の首飾り』自体にとっては明らかに瑣末でありながら、実はその核心につながる問題に取り組みます。それをこれからお示しします。

独創的でありながらも、あるいはまさにそれゆえに、『鳩の首飾り』はアラブ世界ですぐに忘れ去られました。その内容は大胆不敵でした。当時の主流の傾向とは相容れなかったと推測することが妥当でしょう。ヨーロッパ側の受容についていえば、アラブの科学、哲学や文学の数多くをヨーロッパに紹介した中世ラテン語の翻訳者たちの目にも、明らかにこの作品は留まりませんでした。しかし、そもそもこの作品が多くの読者向けに書かれたわけではない点も強調しておかねばなりません。アラブにおいてもヨーロッパにおいても、中世の読者はそれ自体がエリートでしたが、おそらく『鳩の首飾り』の著者は知識階級そのものにはほとんど関心がなかったことでしょう。彼の作品は、ウマイヤ朝の宮廷関係者の極めて限られたネットワークを映す鏡となるべく執筆されたのです。だからウマイヤ朝が内紛によって崩壊し、その首都が北アフリカの部族によって略奪されたとき、この作品も同じ運命をたどり、失われた世界の遺物となってしまったのです。

現存する唯一の『鳩の首飾り』のアラブ語版は、８世紀も経ってから、1851年にオランダの東洋学者ラインハルト・ドージによってライデン大学図書館で発見されました。そしてさらに80年経ってから、ようやくこの作品にヨーロッパの翻訳者たちが気づくことになりました。しかしながら、1931年に発表されたチェコ系アメリカ人の東洋学者アロイス・リチャード・ニークルによる最初の英訳が、この作品への注目を集めるきっかけとなりました。２年後には、ロ

シア語訳が登場しました。さらに1941年にはドイツ語に翻訳されました。1949年には、名高く優秀な研究者ベルシェとガブリエリの二人が、フランス語訳とイタリア語訳を作成しました。そして1952年には、スペインの研究者エミリオ・ガルシア・ゴメスが、最初のスペイン語訳を発表しました。その序文によれば、ゴメスはほとんど30年もかけて翻訳を作成したとのことです。そして翌年の1953年には、アラブ、ペルシャ、イスラーム研究をめぐる多くの業績を持つイギリスの研究者、アーサー・アーベリーによる新たな英訳が日の目を見ました。それぞれの翻訳がごく短い間隔を置いて発表されていることは、一目瞭然です。

中世アラブの恋愛論『鳩の首飾り』への関心がヨーロッパでほぼ同時に起こったことは重要であり、この作品の受容史におけるひとつのエピソードとして目されるべきです。これらすべての翻訳が互いに結びついているありさまを理解するためには、それぞれの翻訳者が言語学的にどんな選択をしているかをつぶさに検証すれば有効でしょう。それぞれの翻訳の細部に注目すれば、翻訳者の知的背景はもとより、彼が抱いた期待の痕跡までを見出すことができます。翻訳がけっして中立的なものではないことは言うまでもないかもしれませんが、翻訳者の選択した言語が歴史的にも個人的にも特徴づけられている点については、注意を払う価値があります。そのうえ作品が翻訳されることは、ある言語の領域から別な言語の領域へと「移送される」ことを意味するわけですが、それを受け入れる「惑星」は真空状態で密閉されてなどいません。その惑星は、期待、世界観、偏見、嗜好、偏向、反論などで満ち満ちているからです。おそらく翻訳の出来具合は、これらの内的影響や外的影響を翻訳者がどこまで汲んでいるかという点に直接かかっているでしょう。しかしそれにもかかわらず、翻訳者の配慮や技巧の問題とは別に、翻訳された作品は新たな環境内で正しい場所を占めるために格闘せねばならないことがあります。新たな読者は作品のごく限られた要素しか評価しないかもしれませんし、著者の主要な関心ではない一面に注目するかもしれません。あるいはまた、翻訳過程において失われたものをものともせず、翻訳作品が時を越えて、ついに根本的なメッセージを聞き取る読者に出会うことがあるかもしれないのです。

しかしながら、私はこの困難な路を選び、さまざまなヨーロッパ言語による『鳩の首飾り』の現代語訳のサンプルを集めようとは思いません。その代わりにこの作品への関心を高め、翻訳を生み出すきっかけとなった学術論争に焦点を絞ろうと思います。そのために、私はこれらの翻訳のなかでもおそらくもっとも重要な翻訳につけ加えられた二つの文章についてのみ参照することにします。

まず私が触れるのは、1952年に出版され、『エル・コジャール・デ・ラ・パロマ』と題されたスペイン語訳です。翻訳者のエミリオ・ガルシア・ゴメスはスペインの外交官にして東洋学者であり、国際的な名声を博したおかげでフランコ政権の圧力を受けずにすみました。ゴメスは内容豊かな序文をスペイン語訳に付し、その日付を1950年６月と記しました。この序文に加えて、『大衆の反乱』や『芸術の非人間化』などの著者として知られる哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセットが求めに応じて、このスペイン語訳や、その他一般の翻訳の哲学的な要素を活き活きととらえるはしがきを執筆しました。

私が多くの点において『鳩の首飾り』のスペイン語訳がもっとも適切な例となると述べたとしても、それはスペイン語訳自体の質を指してそう述べているわけではありません。たとえば、東洋学者のフランチェスコ・ガブリエリが手がけたイタリア語訳は、出版から70年たった今でも、とてもみごとで新鮮な出来栄えです。むしろ批評家たちは、スペイン語訳に欠点があることを強調しています。ある辛らつな批評家などは、剽窃の疑いがあるとまでほのめかしています。またおそらく、2009年にスペイン語の新訳が出たことは偶然ではないでしょう。スペイン語訳が適切であるとすればそれはイデオロギーに基づく判断であり、そのことはガルシア・ゴメスによる序文の最終段落を読めば容易に察することができます――

> 『鳩の首飾り』は、ヨーロッパが愛でるために聖化した文学作品のリストのなかでも例外的な位置を占める。プラトンからスタンダールまで、オウィディウス、プロヴァンスの宮廷恋愛詩人、ダンテ、ペトラルカ、ヘブライ人のレオネなどを経て……このすばらしい作品が、はじめて執筆された土地で現在話されている言語に訳されて、日の目を見る時がついに来たのだ。[2]

この引用は、ガルシア・ゴメスが序文で述べた主な主張のいくつかを要約しています。それはイデオロギーにもとづく言説なのです。この引用中で突出しているのは、「ヨーロッパ」という言葉です。序文全体もそうですが、この段落は、文化をめぐる情熱的な論議への言及に満ちており、それはこのアラブの恋愛論に現代ヨーロッパが関心をもつきっかけになったのです。ここでガルシア・ゴメスが述べているのは、『鳩の首飾り』というアンダルシアの作品が、ヨー

[2] スペイン語からの英訳は筆者による。

ロッパ恋愛文学の正典として不可欠な位置を占めることであり、プラトン、オウィディウス、ダンテなどと肩を並べる作品であることなのです。もしこの文章で暗示していることがはっきりと伝わらなければ、こう言い換えてもいいでしょう――アンダルシアの著者のイスラーム・アラブ文化が、ヨーロッパ文化遺産の不可欠な一部を占めるのだと。

実際の話、1931年にチェコ系アメリカ人の東洋学者アロイス・リチャード・ニークルによる最初の英訳が出版されて以来、この作品においてもっとも重視されたのは、中世プロヴァンスのトルバドールたちや、グイド・グイニツェッリあるいはダンテ・アリギエーリなどのイタリア詩人たちが育んだヨーロッパの宮廷恋愛観に与えた影響の可能性でした。ニークルは、アラブ文学とロマンス文学の伝統的な区分を超える研究上の関心を抱いていましたから、次のような説明不要のタイトルをもつ著作の筆者でもありました――『スペイン＝アラブの詩と古プロヴァンスのトルバドールの関係』(1946年)。彼はいわゆる「アラブ理論」の旗手でした。この理論は主にスペインの研究者によって支持されましたが、イタリアにも支持者がおり、その他のヨーロッパの国々やアメリカにまで影響が及びました。「アラブ理論」とは、ヨーロッパ中世の文学に対するアラブ文化の影響を証明しようとする試みです。この理論は論争を呼びましたし、今でもそういった面があります。一方ではニークルのような研究者たちが、イスラームとヨーロッパの作者たちをつなぐ手がかりがあればなんでも求めました。彼らは寛大でもあれば、おそらくナイーヴでもあったでしょう。他方では、アラブ文化に対する彼らのあからさまな熱狂に対しては、国家の同一性に基づく歴史書を重視する主流派の研究者たちが疑いの目を向けましたし、手厳しく批判することさえありました。

明らかに批評家たちは、「アラブ理論」を退ける際に「純粋な事実」や「科学的な根拠」が欠如していると指摘しました。しかし実際には、彼らはヨーロッパ中心主義的な先入観の影響を被っていることがあったのです。西洋ヨーロッパ文明の起源は、古代ギリシャとユダヤ＝キリスト教の遺産としてのみとらえられました。ヨーロッパの思想を、とうてい対等とは呼べないと考えられていた文化と結びつけることなど、想像もできなかったのです。科学的手法は、イデオロギーに基づくさまざまな偏見に、いかにも客観的であるかのような色合いを与える役割を果たしました。ここでヨーロッパのオリエンタリズムをめぐるエドワード・サイードの画期的な業績を引き合いに出す必要は、ほとんどないでしょう。

ですから、愛はここではあまり問題ではなかったようです。このアラブ＝アンダルシアの恋愛論が発掘されるきっかけを与えたのは、愛というよりは基本的に情熱でした――文化的・政治的情熱だったのです。実際の話、ガルシア・ゴメスの引用の行間を読めば、彼が暗黙のうちに打ち出しているのがスペイン史の新しい見方であることがわかります。9世紀にわたってイベリア半島に存在していたイスラーム（そしてユダヤ）の存在が、スペインにとって不可欠な要素であるとついに認識されたのです。しかも、スペイン史への新たなアプローチを提唱することは、明らかに政治的なもくろみをはらんでいました。なぜならば、それはフランコ政権下のスペインに浸透していた知的服従に対して、はっきりと抗っていたからです。たとえば、アメリコ・カストロのような革新的な歴史家たちは、ガルシア・ゴメスの序文中でも引用されていますが、野心的なスペイン史の新解釈にもとづく研究を続けるために、スペインを去らねばなりませんでした。

貴重なアラブの恋愛論がヨーロッパで翻訳されたのは、基本的にはこの作品自体の独自性には関連しない学術論争が起こったからでした。翻訳者たちの生きた歴史環境のほうが、作品自体がもつ独創性よりも重視されたようです。しかしそれにもかかわらず、これは現代読者へのすばらしい贈り物となりました。読者は、もしかしたら失われたり、専門家しか手に取れなくなったりするところだった作品を読めるようになったのです。そしてついに、翻訳を生んだ環境がなんであろうと、各々の読者しだいでこの作品は最大限活かされることになります。ラテン語の格言にもあるように、「本の運命は読者の腕前にかかっている」のです。

何十年にも渡って、このような傾向の研究が、アカデミズムの規範主義に対して挑戦し続けてきました。しかしそろそろ私たちは、こういった論争を歴史化し、その実り豊かな達成に目を向けるべきです。スペイン語訳のために哲学者のホセ・オルテガ・イ・ガセットが寄せた序文が、そのためのヒントを提供してくれることでしょう。ガセットの指摘には古めかしいところがずいぶんありますが、彼の作品分析の迫力と鋭さはいまだに新鮮です。この序文は、アラブの恋愛論を、それに続くヨーロッパ中世の諸作品と系譜的に結びつけたりする必要から解放する歴史的前提を示して始まります。

> ヨーロッパの中世は、現実的にはイスラーム文明と不可分だった。なぜならば両者は、いいにつけ悪いにつけ、まさにキリスト教とイスラーム教が、

ギリシャ＝ローマ文化の浸透した領域で共存することによって成立していたからである。したがって唯一の適切な視点にしたがえば、中世世界におけるこれら二つの要素は分割不能なのだ――明らかな二元性や相違が認められたとしても、それらは統一性と同一性を示しているのであり、異なる二つの方法で結びついているのである。[3]

かつて、ある日本人の知人がこう言いました――「西洋とイスラーム文明を遠くから眺めれば、この二つはまったく同じように見えるし、それらは統一体を構成している」と。しかしオルテガ・イ・ガセットの主張は、これとは異なるのです。彼は明らかにいわゆる「アラブ理論」を支持してはいますが、実際には作品を解釈する際に、当時流行の研究手法を退けています。なぜならば、いくらその研究手法が寛大であるとしても、それは作品に固有の問題から目を背けてしまうからです。オルテガ・イ・ガセットの意図は、次の引用を参照すればさらに明快となるでしょう。

この本（『鳩の首飾り』）は愛というテーマを示している。昔から私は、新たな文献学を構想し、仮定してきた。この新たな文献学においてもっとも重視されるのは、作品に向かい合ったときに、その作品の本質をしっかりととらえることである。言葉の問題だけにかまけ、際限なくある作品を別な作品へと関連づけるにすぎない文献学には、もう見切りをつけねばならない。

オルテガはここで、最終的に影響のネットワークに作品を位置づけてしまうような系譜調査の手法をしりぞけています。なぜならばそれは、作者固有の声を無視してしまうからです。読者以上に、翻訳者はある誘惑に敢然と抵抗しなければなりません――すなわち、普遍的な現実があり、各々の言語がそれを表現するための異なる言葉をそなえていると信じてしまうことへの誘惑に。『鳩の首飾り』からほとんど安易に近い例を一つとってみましょう。たとえばさまざまなアラブ語を英単語の「love」へと訳してしまったら、いったいどうなってしまうでしょうか。「love」という単語が普遍的であり、その意味が完全にはっきりしていると考えてしまえば、それは欺瞞にすぎません。おそらく私たちは、

[3] スペイン語からの英訳は筆者による。

「love」がヨーロッパ文化によって構成されたものであり、その意味が極めて複雑に階層化された伝統の内で規定されていることを見過ごしているのです。もし言語と伝統の問題を無視して、「love」という言葉がアラブ語の体系を申し分なく翻訳すると思いこみ、結局愛は愛なのだと考えてしまえば、おそらく私たちはなにか根本的なものを見逃してしまうことになるでしょう。翻訳者の仕事は、単に原文の言葉に対応する言葉や熟語を見つけることのみではありません。それはもっと、困難で哲学的な試練なのです。さて、ここでオルテガの引用を紹介しましょう――

> たとえば愛のような人間の現象が、これまでずっと変わらない形で存在し、これからも存在するだろうと考えることは誤りだ。それはちょうど、人間に関するすべてが歴史的に条件づけられていることを無視して、鉱物、植物、動物などと同様に、人間があらかじめ規定され固定された本質をもつと考えることにひとしい。たとえば本能もその一例だが、実際に人間の本質に属しているものでさえ、すべてが歴史的に条件づけられているのである。

どうも翻訳は不可能なミッションであるようです――なぜならそれは、つねに変化し続ける人間の構成物を扱うからです。オルテガによれば、人間の本質は根本的に歴史によって条件づけられています。ヨーロッパの学校で教育された翻訳者が翻訳を行う際には、さらに深刻な問題が生じることになるでしょう。なにしろその翻訳者は、プラトンが唱えたように、世界自体に先立って普遍概念が存在するという考え方に親しんでしまっているのですから。では、もし言語自体の本質が、人間の本質に固有の果てしない変化の証拠を示しているのならば、どうすれば私たちは文章を忠実に翻訳することができるのでしょうか。オルテガの警告のせいで、私たちは相対主義に由来する失望を覚えるしかないのでしょうか。おそらくこういった難問の答は、方法論を再検討するだけでは見出されないでしょう。究極的には、ある作品を私たちが読んだり訳したりするときもっとも重要だと思われるものは、最終的な結果ではなく、耳を澄ます過程です。私たちには、何年もかけて鍛えあげた鋭い耳が必要なのです。言葉を生み出す沈黙を慈しむために。

（訳者付記）

このテクストは、コネチカット大学准教授のアンドレア・チェッリ氏が、静岡大学で講演を行う際に用意した原稿の日本語訳である。チェッリ氏は、2000年にイタリアのパドヴァ大学でイタリア文献学および解釈学の博士号を取得。その後ロンドン大学、ルガーノ大学で教鞭を執った後、2015年から現職に就いている。著作に『暗き流れ　レナート・セッラの哲学的著作と文学的教養』（メデューサ、2010年、伊文）、『ダンテとオリエント　20世紀史学史におけるイスラーム的要素』（カロッチ、2013年、伊文）などがある。

チェッリ氏の講演会「翻訳における愛」は、静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会により、2017年７月28日に静岡大学で催された。猛暑の折に行われた学術的な英語講演であったにもかかわらず、当日は多数の熱心な聴衆が集まった。講演後に寄せられた様々な質問に対して、チェッリ氏が時間の許す限り真摯に応答していたことも申し添えておきたい。